

はくぶつかん

M HIRATSUKA CITY MUSEUM '87 5月号

5月の行事

暮らしの暦

5月	
2	土 古文書講読会
9	土 土曜観察会(平塚海岸)
"	石仏を調べる会
10	日 体験学習「ゾウリ作り」
16	土 古文書講読会
17	日 相模川を歩く会
23	土 土曜観察会(自然の新聞づくり)
"	石仏を調べる会
30	土 天体観察会(望遠鏡の操作)七国荘
寄贈品コーナー	
1~29 歴史部門の展示	
プラネタリウム	
2~7/12 太陽に近い星	
6月	
13	土 土曜観察会(南金目)
"	石仏を調べる会
14	日 自然観察会(比奈窪付近)
寄贈品コーナー	
11~7/30 考古部門の展示	

●6月自然観察会

6月14日(日) 雨天中止
 時間: 午前8時半~午後4時
 コース: 中井町比奈窪~井の口付近
 内容: 雑木林と谷戸田の動植物
 申込み: 6月5日までに往復ハガキで。申込み多数の場合は抽選で30名。

臨時休館のお知らせ

6月2日~10日まで全館の殺虫消毒のため、臨時に休館させていただきます。

2日:八十八夜 立春から88日目。播種の適期とされている。八十八夜の別れ霜。

5日:男児の節供 庭に鯉幟や鍾馗の絵のついた幟をたて、屋内には武者人形を飾る。この日はまた菖蒲湯に入り、母屋や物置の軒先に菖蒲や蓬を束にして挿す。若い衆に頼んで八畳くらいの大風をつくってあげてもらいお礼にご祝儀を出す家もあった。寺田縄には風絵の型(木製)を保有している家がある。大磯の「国府祭」もこの日である。見世物小屋や農具の市が開かれ賑わった。

8日:花まつり: 釈迦の誕生像を花御堂に飾り甘茶をかける行事。

養蚕: 春蚕の掃き立てに始まり、秋蚕・晩秋蚕と忙しかったが、現金収入につながるのでおそろかに出来なかった。

春の農作業: 節供をはさんで田起しと苗代づくり・苗代への播種、煙草・茄子・胡瓜等野菜類や甘藷の植付、更に下って一番ウナイ、二番ウナイと続いた。さて太平洋戦になって桑畑は麦と甘藷畑になり、煙草の栽培も消えてしまったのである。

田の肥料: 秋の内に畑にソラ豆を播いておき、春5月中頃に1mほど伸びたのを切って田に入れ、土をかけておいた。干鰯や大豆粕もよい肥料になったという。

春のご馳走: ヤキゴメ(ご馳走と呼ばぬかも知れぬが)苗代で余った種粃と大豆を炒って白でひき、混ぜて食べた。大豆は節分の残り豆をつかう家もあった由。米の粥とイトコ汁を神に供え家族で食べる。また正油味で小豆・里芋・人参・ゴボウ・昆布・苟・大根を炊いて煮しめた。大根は秋に割って干しておいたものを使った。これをしないと苗が伸びぬとされたのである。

★ おかげさまで

100万人!

★ 11年目に達成



51年5月に開館した平塚市博物館の入館者が3月28日、100万人を突破しました。区切りの100万人目は佐藤実さん（市内八千代町・大学講師）、999,999人目は藤崎友紀子さん（浅間町・高校生）。そして100万と1人目は山本博幸さん（茅ヶ崎市浜見平・写真専門学校を卒業したばかり）でした。

あと10人からあと3人、あと2人と待つ間の長いこと。ガラス戸の向うに赤いジャンパーの女の子が現れた。肩で切り揃えた髪が愛らしい。

少しあって細かい格子柄のスーツを召した紳士が足早やに入ってきた。「失礼ですが、今日の会合にお越しなのでしょうか」「いやブラネタリウ

ムを見に、子どもと一緒に来ました」。息をひそめてこのやりとりを聞いていた皆が、この時ワッとどよめいて、あとは拍手とフラッシュとシャッターの音が嵐になる。続いて爽やかな風のように1人の青年が入って来て、999,999人目と100万人目、そして100万と1人目が決まったのでした。

改めてお三人に並んでいただき、改めてご挨拶を申し上げ、100万人目の入館者になられた佐藤実さんにくす玉の紐をひいていただいた。

写真中央がその佐藤さん。右隣りは999,999人目の藤崎友紀子さん、左隣りは山本博幸さんで、100万と1人目になられた方です。



○開館10周年記念特別展
第1回平塚市博物館公募写真展入賞・入選作品

「相模川流域の自然と文化」と題して、例えば農業や漁業の仕事の様子、祭りや年中行事、野鳥の生態に四季の草花など、博物館資料として活用できる写真を公募したところ、総数184点のご応募をいただきました。ここに入賞者氏名とその作品名を掲げて、お礼にかえたいと思います。ご協力、ありがとうございました。

優秀賞

相模川河口の海釣り基地	内田 敏彦
米の検査	湯山 師英
平塚海岸から見た大島大噴火	小山田 孝嘉
ハマシギ	鈴木 恒
田名の的祭り	新本 正秀
相模川夕景	杉山 安雄
鳥屋の祭礼	永井 隆
コサギの闘争	増田 智生
網直し	春原 悦子
出荷準備	小松 良子
つり船	大石 久江

優秀賞特別

湘南道路ほか8点(昭和27年~34年)	山本 登
---------------------	------

入選

イヌタデの群生地	内田 敏彦
須賀港の漁夫達	"
相模川河口のポート基地	"
平塚の夏祭り	新本 正秀
田名八幡宮の番田神代神楽	"
夏の相模川	"
ユリカモメ飛翔	増田 智生
田名八幡宮の獅子舞	永井 隆
河口の朝景	春原 悦子

入選特別

漁船(昭和28年)	中村 楠雄
-----------	-------



博物館が発行した"本"

下記資料については、まだ残部がありますので、お入用の方はお申込みください。

博物館 (電話0463・33・5111)
ガイドブック: 3四季の星座観察(300円)
4地層と化石(400円)/5高麗山湘南平(450円)/6平塚の遺跡(500円)/7平塚四季の自然(500円)
大磯丘陵の地質2・3(900円) 湘南植物誌1・2(800円) 平塚鳥類誌(600円) 須賀の民俗(1,500円) 王子台遺跡(500円) 博物館ガイド(800円)
図録: 相模湾の魚と漁撈/街の生きものたち(各500円)/飛騨の民具(300円)/神奈川の化石(800円)/相模川流域の横穴墓(800円)/林の生きものたち(600円)
年報: 3~6号(各400円)7号(500円)8号(550円)9号(600円)
自然と文化 2号(600円)3~4号(700円)5号(550円)6号(600円)7~8号(650円)9号(700円)
目録: 所蔵資料目録: II(350円)III(500円)IV(400円)/シダ植物標本目録(500円)
市史編さん係(電話0463・32-5843)
平塚市史: 1資料編古代・中世、付録北条家過去帖・北条家系図(5,300円)/2資料編近世(1)、付録近世平塚を学ぶ人のために-平塚市近世史入門-(5,000円)/3資料編近世(2)付録近世平塚の領主たち-領主の印判と花押-(5,000円)/4資料編近世(3)、付録近世平塚と近在市場の相場-相場帳と石代納値段-(5000円)以上各送料は400円です。
平塚市史民俗調査報告書: 1神田・城島(1000円)/2豊田・岡崎(1,200円)/3土屋・吉沢(1,300円)/4金目・金田(1,400円)5旭(1,300円)/6大野(1,300円)以上各送料は300円です。同じく別編明治38・9年農具一覧并図解(1,600円)平350円)

ここが
見どころ

≡ 旅 と 宿 ≡

※二階展示コーナー 22

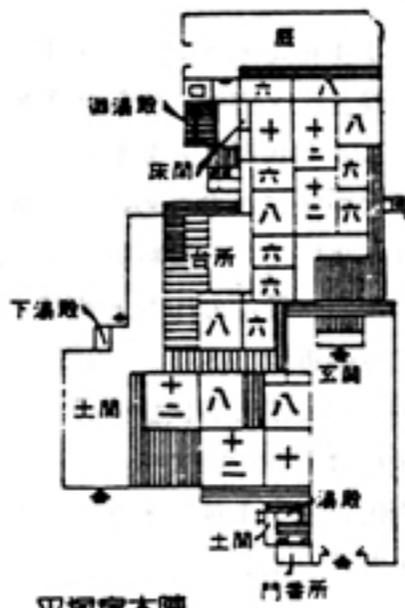
平塚宿

旅行者の宿泊と荷物の継立てを主な目的とする宿駅は、幕府により慶長六年(1601)に指定され成立します。この時、県内では神奈川・程ヶ谷・藤沢・大磯・小田原とともに平塚も宿駅に指定され、以後、東海道の宿場の一つとして発達します。

天保十四年(1843)の資料によれば、平塚宿には、家数443軒、その内訳は、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠54軒、その他農家と商家という具合で、宿内の人数も2,114人にのぼります。

宿は、柳町・西仲町・東仲町・二十四軒町・十八軒町の五つの町からなっており、本陣・脇本陣・高札場、さらに、毎月10日替の交代で勤める東組・西組問屋場などは、宿内のほぼ中央に位置していました。

大名宿といわれる本陣・脇本陣は宿駅におかれた大名・公家・幕府役人のための宿泊施設です。平塚宿本陣は代々加藤家が、脇本陣は山本家が経営し、その規模も宿内ではひときわ目立つ建物で、特に、本陣は書院造りで内部は宿泊者と本陣家族とは明確に区別される構造になっていました。



平塚宿本陣

旅籠は、本陣・脇本陣と違い、庶民の旅籠といえます。平塚宿の旅籠は、多く農家との兼業で小規模なものが多かったといえます。旅籠は、平旅籠・食売旅籠・油紙宿とに分けられます。平旅籠は一般旅籠、食売旅籠は飯盛女を置

く旅籠、油紙宿は素泊まり形式のいわゆる木賃宿のことをいいます。

助郷

ところで、宿駅は、本来、幕府の御用状や御用箱の運送、あるいは大名、幕府役人等の荷物継立てのために設定されたために、宿場には決められた人馬を常備していました。しかし、参勤交代が制度化され、街道を利用する人や物資の増加により、宿駅が常備する人馬では継立てが不足する場合には、近くの村に継立てを強制的に割り宛て負担



平塚宿問屋場印籠

させるようになります。これを助郷といい、この助郷役を負担する村も助郷といいました。

元禄十五年(1702)当時の平塚宿の助郷は、わずか23か村を数えるだけでしたが、享保三年(1718)には、56か村に増加し、天保期(1830年頃)には、46か村という具合に増加しました。助郷村は、6~9か村がグループとなり、岡崎組、城所組、豊田組など幾つかの助郷組合を組織し、この助郷組合を単位として、宿場から割り当てられた助郷を負担します。各助郷組合は惣代を問屋場に派遣し、負担が正当なものであるかどうかを確認のうえ助郷を負担したといえます。過重な助郷の負担は、助郷村とそれを取り決める問屋との間でしばしば問題となり、助郷忌避の騒動にまで発展することも多く平塚宿でも弘化・嘉永期に助郷騒動がありました。(土井)